

△コメント△

## 神野志隆光 「古代神話の多元性と天皇の正統性」について

黒崎輝人

神野志氏の研究は、思想史学の立場から見て次の二点で新鮮な魅力を持っている。

一つは、『古事記』と『日本書紀』を一括して「記紀神話」と呼ぶことへの批判である。これは次の第二点、方法論的批判とも密接に関係するのであるが、まず得られた結論のほうから見ていこう。氏は、『古事記』と『日本書紀』は、似たような素材を使って天皇支配の正統性を主張していても、「機軸」「コスモロジー」が異なり、本質的に違う神話であるとす。同様に「宣命」や柿本人麻呂の長歌もそれぞれ別の神話世界を作っている。そのような意味において古代神話の「多元性」を認めようというのである。

二つめは、言語表現による定位・定立を重視する作品論的分析がまずなされるべきだという主張である。『古事記』や『日本書紀』を出来上がった作品と見て、それぞれの全体構造を捉えることが優先される。戦後の神話研究の主要な潮流である成立論的方法は拒否され、記紀の一部分を材料として記紀以前に遡ることが拒否される。

総じて言えば、記紀を歴史史料の集合体としてではなく、それぞれに独立した「作品」として捉えようという立場と言えよう。

記紀を、それぞれ別個の、独自の論理を持つ作品としてとらえる視点は、故梅沢伊勢三の『記紀批判』などの先駆的業績がないではない。しかしその場合でも、成立論的傾向は強く、天皇の支配を正當化する言語表現として神野志説のように明確に位置づけられてはいなかった。

史料批判の第一歩としてなされるべきは、史料に内在する論理構造に従って史料を読むことである。それが従来ややもすればなおざりにされてきたことは否めない。神野志氏がその点を方法の問題として自覚的にとりあげ、その結果として古代神話の「多元性」を強調している点は、正当に評価されなければならない。

今後の史料批判の規準となるものと考える。

しかし問題を個別に限定して、『日本書紀』の「機軸」や「コスモロジー」をどう捉えるかという点では異論がある。

神野志氏は『日本書紀』は「本文」で理解すればよいという。たしかに、『日本書紀』は成立当初、「一書」の部分は細注（割注）形式で書かれていたと推定されている。従って「本文」と「一書」の

比重が現在の国史大系本や日本古典文学大系本とは異なり、「本文」の方がはるかに重かったことが推定できる。『日本書紀』を本文で理解しようとする神野志氏の主張も根拠がないわけではない。

だが、『日本書紀』を本文だけで理解することは正しいのか。『日本書紀』が本文の他に様々な異伝を「一書」として含むこと自体をどう考えるか。『日本書紀』は「一書」を含めて初めて一つの「作品」として成り立つのであって、「本文」のみで「全体把握」はできないはずである。「一書」を切り捨ててしまつては、「一書」を含む形で作られた『日本書紀』の編者の構想そのものを切り捨てることになってしまう。

また、すでに『古事記』がありながら、改めて『日本書紀』が作られていることをどう理解するか。単に推古天皇以降を書き足すだけではなく、神野志氏の言う如く完成度の高い『古事記』の「神代」構想を捨て、「一書」羅列の形で「神代」全体の構想を立て直さなければならなかった理由はなにか。

私見では、内容以前の、テキストの形式的あり方自体のなかに、その理由を求めることができるのではないか。結論から述べれば、『日本書紀』は「作品」としての整合性や一貫性を放棄しているのではないか。

『日本書紀』の「本文」のみを繋ぎ合わせてみれば明らかであるが、そこには必要最低限のことしか述べられていない。物語の体を成していない。それは神野志氏の言うように「陰陽原理」を「機軸」としているが、『日本書紀』編者はその「原理」自体にどれだけの重きを置いているのか疑問である。

この事は、『古事記』のような一貫した「機軸」や「コスモロジー」による天皇の正統性の保証を放棄したところに『日本書紀』「神代」の世界が成立した、と考えるべきことを示唆する。

さらに言えば、それは七・八世紀の世界が、一貫した神話のみによつては天皇の正統性をすでに保証しきれなくなった世界であることをも示唆する。であるからこそ、様々な形の「機軸」が構想されて、神野志氏のいう「多元性」が生じたのではないか。そのような流れの最後に、全ての「機軸」を「一書」として包み込もうとする『日本書紀』の「神代」が構想されたのではないか。それは律令国家の神祇祭祀制度の重層性・包含性とも軌を一にするあり方である。

神野志氏の論考を基本的に支持しつつ、『日本書紀』を『古事記』と同列に捉えてよいのかという視点から、私見を述べた。歴史学は変化を追う。その意味で私見は神野志氏が批判する成立論の立場をとる。しかし少なくとも『日本書紀』に関するかぎり、私見のように成立論的視点を加えた方が分かりやすいと思えるのだが、如何であらうか。

(江戸川女子短期大学教授)